
眠れぬ魚

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れぬ魚

【ZPDFアード】

Z6268Z

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

だつていつも不安だもの。

あなたがわたしを嫌いになつたらどうじょう。

あなたに捨てられちゃつたらどうじょ。

いつもいつも思つてしまつ、いつか壊れてしまつものをその「いつか」がいつくるのかとびくびく暮すよつは、今すぐ壊してしまつた方が精神上良いのではないかと。

そしてそれを言つと、必ずあなたは怒るのだ。

田覚めた時から気分はオレンジジュースだった、それではまつすぐにキツチンへ向かい白く小さな冷蔵庫 夜中それは虫の羽音に似た音をずっと立て続けている を開けて瓶入りのそれを取り出す。行儀悪くキヤップを外してから直接口をつけてごくごく飲んで、わたしが男だつたらきっと喉仏が上下するのが適確にはつきりと分かつてそのシルエットは美しいだろうな、と思つた。けれども男の喉仏が一番意志を持つてくつきりと動くのは言いたい言葉をそつと飲み込んだ時だ、わたしはそれを知つてはいる、飲み込まれたもう永遠に発せられなくなつてしまつた言葉が愛のものであれ別れのものであれ。

オレンジジュースは喉をちりちりと傷めるように酸っぱくすべり落ちてゆく。妊婦は酸っぱいものが欲しくなると聞くけれど、生理前になるとオレンジジュースやグレープフルーツジュースが欲しくなるわたしもその素質を持つてているということだろうが。

急に哀しい気分になつてきて、わたしはテーブルにキヤップも締めずジューースを放り出すと、慌ててベッドへ戻る。恋人は静かでもない寝息を立ててやわらかすぎる枕に頭を預けていた。

「別れよう、」

「 ん、今、何時？」

挨拶もなしでいきなり用件を言い出すと彼は寝惚けた顔で時間を見た。知らない、と答える、多分朝だよ、と付け足したけれどそれは彼の欲しい情報ではなかつたよつだつた。

「なに、」

酒臭いあぐびをされて、そうだ昨日はふたりで随分飲んだんだつけ、と思い出す。飲んだ後シャワーも浴びずにセックスしたら疲れてそのまま寝てしまつたのだった、思い出してもなんだかあまり良い記憶ではなかつたのでわたしは思い出さなかつたことにする。

「なに、」

彼は半分寝ているような目でもう一度同じことを聞いた。サッカー青年の彼は真っ黒に日焼けしていてガリガリに瘦せていくくせにわたしよりもご飯を食べる、そして抱き締めるとお口様の匂いがちゃんとする男で、そういうのがベッドに寝ていると眠るのは健康に良いことなのだと真剣に思わされたりしてしまう。酒もタバコも好きで野菜は嫌いだしわたしが作らないとカツプ麺だの牛丼だのばかりを食べているくせに健康そのものに見えるというのも不思議な感じだ、体力があるせいなのかもしれない、そしてまたわたしは哀しくなる。

「だめ、」
「なにが」

口の中がオレンジ味でいっぱいでもう切なくなる、別れようよ、と言つてしまつのはさつきのオレンジジュースと健康そのものの外見をした彼のせいだ。

「……寝惚けてんのか」

「違うよ、わたしの方が先に起きたもの」
「じゃあなんだよ」

目つきの悪い彼はしつかり覚醒しても目は細いまま、その目がわたしをまっすぐに捉えているのでわたしも瞬きを忘れて凝視してしまう、目を逸らしたら負けの野生動物みたいに、彼のくちづけはライオンみたいに獰猛で素敵なのだ、健康な外見の野生動物、わたしの恋人。

「別れようよ、」

わたしの恋人、が、いつまでわたしの恋人でいてくれるのか心配になつて時々とても哀しくなつてしまつ、手に入れたものを知らない間に取り上げられたり逃げ出されたりしたらどうしていいのか分からなくなつてしまつと、想像しただけでわたしは目の前が暗くなるのを実感する。半泣きで、それくらいなら自分から手放した方が何百倍もマシ、と別れを切り出してしまう。捨てられたくない

ライドよりも、誰かにいつか取られてしまう恐怖の方が強かつた、だからわたしの恋は元々誰かに所有されている人に向けられてのものが多かった。誰かの所有物なら、最終的にはわたしを捨てて所有者のところへ帰つてゆくのが分かつていたから、そうすればわたしは安心していられる。大好きな人を失くした恐ろしいほどの喪失感、それと同時に少しずつだけれど滲み出してくる安堵感。ほら、あれはわたしのものではなかつたから、結局帰つてしまつたでしょう、という類の。

でも今の恋人は違う、彼は正真正銘わたしの所有する人　本人に言つたらもちろん嫌な顔をするだろう、でもわたしは所有という言葉の持つ甘い束縛が大好きで、自分の中の矛盾に吐き気もするであり、建前上わたし以外の女とは関係を持ちません、ということになつてゐる、それは結婚より効果が薄いかもしれないけれど、それがまた怖い。どうして彼がわたしを選んで所有してゐるのか、また、わたしの所有物になつてゐるのかがちつとも理解できない。彼にはもつともつと可愛らしい人が似合うのではないかと、もしくはもつともつとスポーツ万能な女性が似合うのではないかと勝手に想像しては嫉妬しては落ち込んでしまう。

もう実際わたしは半泣きになつて、オレンジジュースを飲んだついさつきまでが遠い昔のように思えるくらい哀しくて頭がぐるぐるして、恋人のまだ眠たげな呆れ顔もちゃんと目に入つてゐるのだけれど、ぐるぐると、頭が。

「　ちょっとこっちこい、」

手招きされて身体を半分ベッドに乗せる、スプリングがわたしの膝の下で小さくきしむ。

「もうちょっと、」

「　なに、あつ、」

上半身裸で眠る癖のある恋人はあつという間に手を伸ばしてきて、わたしの頭をゴン、と殴つた、軽い感じではあつたけれど、それはちゃんと骨まで響いてわたしは声を上げてしまう。

「だつて、」

彼が何も言わないうちにわたしは言い訳を始める。恋人歴が少し長くなつてくると不安で不安で堪らなくなつてくる、いつ捨てられるのか、いつ飽きられるのか、いつ他の女を片手に抱いて、お前なんてもう必要ないんだと言われるのか。

「お前は不安症過ぎる」「

まったく俺の睡眠時間返してくれよ、それと見ていた途中になつた夢も、と彼は笑つた、唇の端をきゅうつと持ち上げる、どこか意地悪そうにも見えるけれど上機嫌な時しかしない、わたしの大好きな笑い方で。この笑顔がいつかわたし以外の誰かに向くのかしら、と、そう思つてしまつことも怖くてわたしは俯く。

不幸が怖い、沈黙が続いて恋人の関心が他へ向いて、その時自分が相手を好きになり過ぎていたらどうしようと思つてしまつたらしさは半狂乱になるだろう、死んだ方がマシだと思つてしまつたら実際に手首を切る用の安全カバーがついていないカミソリくらいは買つてしまふかもしない、いつかくる最大の不幸よりは自分から選ぶ大切なものを自分の手で失う不幸の方が比較的軽いのではないかと、そこまで思つた時点でわたしはもう既に自分が彼を好きになり過ぎてしていることに気付いた。

「だめ、」

「一回田の、だめ、は心許なくさつきよりも小さくそれでいて甘えた声で響いた、まるで自分の声ではないように。

「俺のこと大好きなくせに」

「……うん」

「別れようなんて、無理なくせに」

「……うん、」

「おいで、」

わたしを叩いた手が今度はわたしのために広げられる、飛び込むと体温の高い彼の肌で触れた部分からわたしの不安がゆるゆると溶けはじめる。

「好き過ぎて、苦しい」

「男冥利に尽きるな」

「誰かに取られちゃつたらどうしようつて、いつも不安」

「お前が思つてるほど俺はモテなこよ」

「わたしよりもっと似合つ人がいつ出でくるが、びくびくしちゃう」

「俺は後何回お前に『もつ別れる』つて起されるかびくびくしちゃう」

くくく、と彼が笑うと、見上げた視線の先で喉仮がそつと動くのが目に入った。心臓の音が張り付いた耳の奥へ流れ込んでくる、彼の体温はわたしのそれより遙かに高い。きっと情熱的に生きているせいで、男、というよりは純粹な、男の子、としての情熱。サッカーが好きだつたり、愚痴は言つてもプライドを持つて仕事に接したりする、そういう類の。

「俺がお前以外の誰かを好きになつたりする『いつか』とか考えても仕方ないじゃん」

それよりお前は自分が俺以外の誰かを好きになつた時のこととか考えないの、と聞かれて、わたしはポカンとしてしまつた。そんなこと、考えたこともない。

「なにそれ、」

「俺だつて、お前が誰か俺以外を好きになつちゃつたりびつするんだろうつて考えるよ」

「そんなことあるはずがないじゃない、他の誰か？ そんなの好きになるはずがないじゃない、」

そんなことも分からぬの、わたしはあなたが大好きなのに、と言つと怒つたような声になつた。それをまた、彼は面白がつて笑う。

「そういうことを言つ奴に限つてある日突然誰かを好きになつて、今までの彼氏を平氣で捨てるんだ、汚れたティッシュみたいに、それで振り返らない、新しく好きになつた奴ばかりを真剣に見て、過去の男なんてちらりとも思い出さないんだから」

「そんな、」

「いつか捨てられるかもしれないっていう怖さは誰もが持ってるんだから、そんなの今は気にしないでいなさい」

大きな手の平で頭を撫でられる、髪が指の間をさりさりと流れる静かな感触。

「今は？」

「今は」

「じゃあ、いつかは？」

「その時考えればいい」

「わたしが他の誰かに取られそうになった時は？」

「うん？……そうだな、サッカーボール持つて取り戻しに行くよ

「なんでサッカーボール？」

「野球少年じゃなかつたから家にバットがないんだ、代わりにボーリル」

それを相手に蹴り込んでわたしを奪うのね、と、うつとりした声で言つたら鼻を摘まれた。

「絶対？」

「お前の好きな歌では、絶対なんかないって言つてるのに？」

質問返しだ、彼は笑つてゐる、わたしは喉の奥でオレンジジュースの味を感じてゐる。

「絶対が絶対でなくとも、約束してくれる？　じゃあ、わたしが死んだら？」

「あのや、この会話つてただのバカツブルだと思つただけどどうだろう？」

「いいの、わたしが死んだら？」

「神様にサッカーボール蹴り込んで返せつて言つてやるよ、お前が地獄とかに落ちてたらどこにボール蹴り込めばいいんだ？」

「死んでも生き返させてくれるの？」

「だから、じうじうのつてや、」

朝っぱらからいる会話ではないと思う、と照れたのか彼は身体

を離してしまった。それでもわたしがそれでは不安がると思つたのだろう、手間のかかる女め、と大きな口を開けてわたしの鼻に軽く噛み付いてくる。間違えた、などと彼は言って、一度顔を離して、わたしはブルーのベッドシーツに沈んだまま彼の次の行動を知つていながら待つていてる。

「俺の存在で不安になるな

「……サッカーボール、信じていい？」

見上げた形で彼が笑うのを見た、わたしの大好きな笑い方でその笑い方をすればわたしが喜ぶことを、彼は充分に知つていてる。手を押さえられて顔が近付けられる、静かに甘く空気が重なつてくる。眠れない魚みたいにわたしはシーツの上で漂い続ける、けれども救いは彼の手がちゃんとわたしを繋ぎ止めているということだ、わたし達はどこにも行かない、甘い束縛という名の愛をわたしは信じている。

愛の言葉を、溶けかけた状態で耳からではなく直接唇から聞いて、わたしは目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6268n/>

眠れぬ魚

2010年10月10日05時46分発行